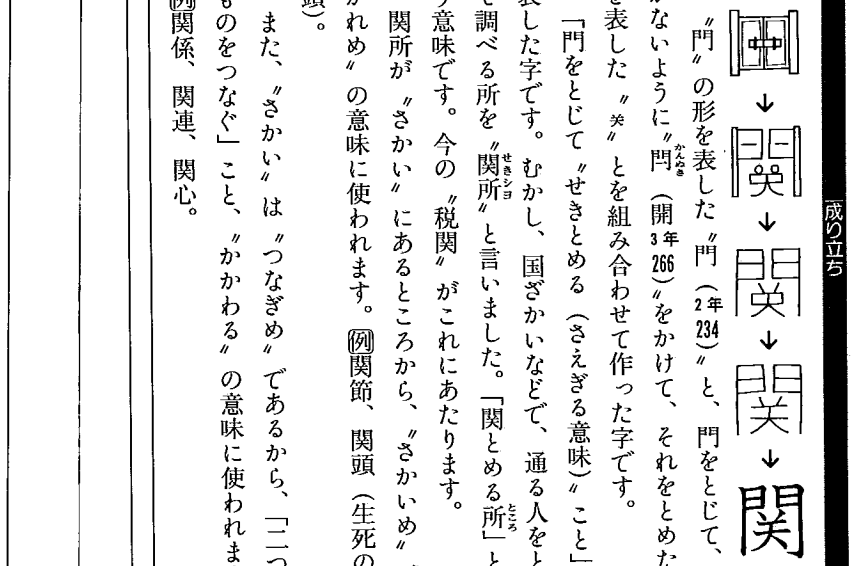
関

四年　画数 14　筆順 門門関関　オン カン　クン せき

成り立ち



〝門〟の形を表した〝門（2年234）〟と、門をとじて、開かないように〝門（開年3266）〟をかけて、それをとめた形を表した〝关〟とを組み合わせて作った字です。

「門をとじて〝せきとめる（さえぎる意味）〟こと」を表した字です。むかし、国ざかいなどで、通る人をとめて調べる所を〝関所〟と言いました。「関とめる所」という意味です。今の〝税関〟がこれにあたります。

関所が〝さかい〟にあるところから、〝さかいめ〟〝分かれめ〟の意味に使われます。例関節、関頭（生死の関頭）。

また、〝さかい〟は〝つなぎめ〟であるから、「二つのものをつなぐ」こと、〝かかわる〟の意味に使われます。例関係、関連、関心。

使い方

▽むかしは、ほうぼうに、関所があって、通行人を調べたものでした。中でも箱根の関所は有名です。

▽ぼくは、切手を集めるのが好きです。とくに、外国の切手に関心があります。もう、百枚くらい集めました。もっともっと集めたいと思います。

熟語例

▽関節（骨と骨のさかいの、つながっている所。「関節炎」といえば、関節がはれて痛む病気です。）

▽関頭（分かれめ。「生死の関頭に立つ」といえば、「生きるか死ぬかの分かれめにいる」という意味です。）

▽関係（二つのものが、つながりを持っていること。また、そのつながり。「この足あとは、盗難事件と、なんらかの関係があるにちがいない」などというふうに、つかいます。）

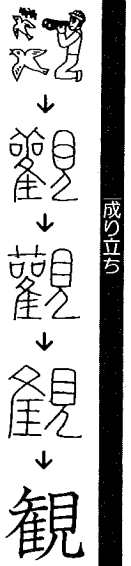
▽関連（かかわりがあること。つながり）

▽関心（心にかけること。とくに、興味を持つことをいいます。「わたしは、オペラに関心を持っています」などというふうに、つかいます。）

観

四年　画数 18　筆順 ⺈ 𠂉 𠂉 雚 雚 観　オン カン　クン

成り立ち



〝知る〟意味の〝𠂉〟と、〝鳥〟の意味の〝隹〟と、〝見〟とを組み合わせて作った字です。

「〝鳥〟をよく〝知る〟ために〝見る〟こと」を表した字で、「こまかい所にまで気をつけて見ること」を表したものです。「熱心に見ること」でもあります。例観察、観測、観劇。

「物の見方」という意味にも使われます。例楽観、主観、客観、先入観。

また、「ながめ」という意味にも使われます。例壮観。

〔旧字体は〝觀〟で、鳥が熱心に鳴き合う意味の雚と見との会意・形声字である。雚の音は〝カン〟にある。〕

使い方

▽ぼくのおとうさんとおかあさんは、野鳥を観察するのが趣味です。日曜日になると、一家そろって、双眼鏡を手に、野山にでかけて行きます。

▽ぼくは、天体観測が好きです。晴れた夜には、望遠鏡で星の動きを観察します。

熟語例

▽観察（ものごとを、よく見ること。また、ものごとを客観的に見ること。「人間の行動を観察していると、人の心の動きがよくわかって、おもしろい」などというふうに、つかいます。）

▽観測（天体や気象などの変化を観察して測ること。また、そこから変化して、あることをおしはかること。「特派員の観測によると、当分、アメリカの好景気は続きそうだ」などというふうに、つかいます。）

▽観劇（芝居を見ること。演劇を見ること。「おばあちゃんは、歌舞伎座へ観劇に行きました」などというふうに、つかいます。）

▽楽観（あらゆることを、良い方に考える見方。「あの人は、たいそう楽観的な人だ」などと、つかいます。）